

日・韓看護大学生の喫煙の状況と意識調査

長崎と晋州・地方都市における比較

中尾理恵子¹・川崎 涼子¹・森下 路子¹Kang Mal Soon², Kim Tae Kyung²

要 旨 日本と韓国の地方の一大学において、看護大学生を対象に喫煙の状況と喫煙に関する意識調査を自己記入式質問紙調査で行なった。両大学の学生では、家族等との同居形態には違いがみられたが、喫煙者の割合は同程度で低かった（日本A大学1.2%、韓国B大学1.4%）。しかし、韓国B大学では低学年で喫煙者がみられ、日本A大学では高学年でみられた。喫煙に関する意識調査では、知識を問う質問項目では差がなく、認識や態度を問う質問項目では違いがみられた。これらには両国の喫煙対策のあり方の違いが影響していると考えられた。

保健学研究 21(1) 11-16, 2008

Key Words : 喫煙・看護大学生・意識調査

(2008年7月25日受付)
(2008年9月9日受理)

I はじめに

看護大学生は、将来において医療や公衆衛生の場面で禁煙指導を行なう立場であり、喫煙に対して正確な知識をもって行動することが期待されている。しかしながら、大学生の喫煙者割合は入学後学年が上がるごとに高くなり¹⁻³⁾、看護師の喫煙者割合は一般女性よりも高いという報告^{4,6)}がある。また、韓国においても青少年の喫煙問題が表面化してきており⁷⁾、早急な対策が求められている。喫煙に関わる問題は、日本と韓国それぞれの国においては研究が取り組まれているが、日本と韓国で共同して調査した論文はほとんどない。喫煙問題の対策は、幅広い取り組み方法で実施することが効果的であることから、看護大学生の禁煙対策を検討するために同じアジアでありながら文化背景の異なる日本と韓国で同じ質問紙を用いた意識調査を行なった。

この研究の目的は、看護大学生の喫煙状況と喫煙に対する態度や認識を日本と韓国で比較することで、看護大学生の喫煙問題対策のあり方を検討することである。

II 対象と方法

1. 調査対象

A大学医学部保健学科看護学専攻学生（以下、A大学）と韓国B大学看護学科学生（以下、B大学）を対象とした。A大学は長崎県にある国立系総合大学であり、B大学は韓国晋州市にある看護師や検査技師など医療従事者養成の私立大学である。調査は、講義終了時に口頭と紙面上で、研究の主旨とプライバシーの保護、回答は強制

ではないことを説明して質問紙の配布を行い、回収ボックスを使用して回収した。A大学259名（1年次生68名、2年次生54名、3年次生73名、4年次生64名、回収率86.3%）、B大学278名（1年次生98名、2年次生90名、3年次生90名、回収率92.7%（B大学は3年課程））から回答を得て、分析対象とした。

2. 調査方法

同一内容の質問紙を作成するため、韓国B大学研究者が日本語で作成した質問紙をEメールで送付してもらい、内容を確認し日本語に即した言い方に修正した。再度、B大学に送付し内容の確認を行った後に使用する質問紙とした。

質問紙は無記名とし、調査内容は年齢、性別、ひとり暮らしや家族同居、友達との同居、寮などの生活形態、学生自身が1ヶ月に自由に使用できる金額などの情報と、喫煙行動の有無、禁煙あるいは将来の喫煙開始の意思、喫煙の健康影響に関する知識、喫煙に関する社会的な意識などであった。喫煙の有無の区分は、この1ヶ月間に1日でもタバコを吸った日があれば喫煙ありとするように説明した。質問項目の内容は信頼性のあるものであった（Cronbach's alpha 0.64）。なお、調査期間は、A大学では2007年7月から8月、B大学では2007年10月であった。

回収したデータは、それぞれの大学において集計を行い、各自の集計結果を交換して分析した。分析は、²検定とMann-Whitney testを用いて危険率5%で検定した。

1 長崎大学医歯薬学総合研究科

2 晋州保健大学看護学科

3. 倫理的配慮

質問紙は無記名とし、個人に関する情報は年齢と性別の最小限とし個人が特定されることがないように配慮した。なお、本研究は、A大学医学部保健学科の倫理委員会で承認を得て実施した。

III 結 果

1. 対象者の概要

対象者の概要を表1に示す。A大学とB大学ともに全体に占める男性の割合は少なく、同程度であった（A大学8.9%、B大学8.3%）。また、全対象者の平均年齢は20.3歳であった。生活形態は、A大学学生では「1人暮らし」60.2%が最も多く、次に「家族と同居」35.9%であったのに対し、B大学学生では「家族と同居」36.9%、「寮」24.9%、「1人暮らし」16.5%、「友達と同居」16.2%と異なった構成であった。学生自身が1ヶ月に自由に使用できる平均金額は、A大学学生34,586円、B大学学生238,618ウォン（約24,267円）であった。

2. 喫煙の状況

この1ヶ月間に1日でもタバコを吸ったことがあるかの問いに「はい」と答えたのは、A大学3名（1.2%）、B大学4名（1.4%）であった（ $p > 0.05$ ）。しかし、A大学では3、4年次生に喫煙ありの回答があったが、B大学では1、2年次生に喫煙ありの回答があった。（表2）

3. 喫煙の健康影響の知識

喫煙の健康影響に関する質問項目に対し「はい」「いいえ」の選択で回答を求めた。表3に各項目の「はい」と答えた割合を示す。循環機能や癌、妊娠への影響などの疾患に関連する項目や喫煙の仕方と健康への影響に関する項目は、両大学ともに知識ありの回答が高い割合であり有意差は見られなかった。しかしながら、判断や行動に関する項目では両大学間の回答に有意差が見られた。「一般的にタバコを吸う人は吸わない人より寿命が短い」の質問項目で、「はい」と答えたのはA大学93.4%であったのに対し、B大学では76.3%と有意に低い割合であった（ $p < 0.05$ ）。また、「喫煙で運動能力が低下する」は、A大学96.9%、B大学77.3%（ $p < 0.01$ ）であった。「喫煙はストレスを解消させる」に「はい」と答えたのは、A大学60.6%、B大学33.8%であった（ $p < 0.01$ ）。「人が集まる場所での喫煙は法律違反である」の質問項目で「はい」と答えた割合は、A大学52.1%であるのに対し、B大学88.8%と有意に高い割合であった（ $p < 0.01$ ）。

4. 将来の喫煙開始の意思と禁煙困難感

自身の将来の喫煙開始に対する意思を「友人が喫煙をすすめたら吸ってしまうかもしれない」、「今後1年間に喫煙を開始するかもしれない」、「5年後には喫煙をしているかもしれない」の3項目で質問した。回答は「全くそう思わない」、「そう思わない」、「そう思う」、「とても

表1. 対象の概要

(%)

		A大学（日本）				B大学（韓国）		
		1年次生	2年次生	3年次生	4年次生	1年次生	2年次生	3年次生
		n=68	n=54	n=73	n=64	n=98	n=90	n=90
性別	女性	60 (88.2)	50 (92.6)	67 (91.8)	59 (92.2)	88 (89.9)	82 (91.1)	82 (91.1)
	男性	8 (11.8)	4 (7.4)	6 (8.2)	5 (7.8)	10 (10.2)	5 (5.6)	5 (8.9)
平均年齢		18.9	19.7	21.3	22.0	19.4	20.5	21.6
生活形態	1人暮らし	36 (52.9)	35 (64.8)	40 (54.8)	45 (70.3)	14 (14.3)	19 (21.1)	13 (14.4)
	家族同居	29 (42.6)	14 (25.9)	31 (42.5)	19 (29.7)	40 (40.8)	25 (27.8)	37 (41.1)
	寮	1 (1.5)	0	0	0	32 (32.7)	19 (21.1)	16 (17.8)
	下宿	1 (1.5)	3 (5.6)	0	0	1 (1.0)	0	1 (1.1)
	友達と同居	1 (1.5)	0	0	0	6 (6.1)	20 (22.2)	19 (21.1)
	親戚の家	0	1 (1.9)	1 (1.4)	0	3 (3.1)	3 (3.3)	4 (4.4)
	未回答	0	1 (1.9)	1 (1.4)	0	2 (2.0)	4 (4.4)	0
1ヶ月の平均的金額（日本円）		25,689	33,804	39,576	39,852	21,788	24,713	26,550

表2. 喫煙の状況^a

(%)

	A大学（日本）	B大学（韓国）
1年生	0	3 (3.1)
2年生	0	1 (1.1)
3年生	1 (1.4)	0
4年生	2 (3.1)	-
合計 ^b	3 (1.2)	4 (1.4)

a 「1ヶ月のうちに1日でもタバコを吸ったことがある」に「はい」と答えた人数

b ²検定 $p > 0.05$

表3. 喫煙の健康影響の知識^a

	A大学(日本)	B大学(韓国)	p値 ^b
血液循環に悪影響を及ぼす	99.6	93.5	n.s
肺がんなどのさまざまな癌を引き起こす	99.6	97.8	n.s
妊娠中のタバコは早産や低出生体重に影響を与える	99.2	95.3	n.s
喫煙で皮膚が乾燥して荒れる	88.8	92.1	n.s
喫煙で歯が変色したり口臭が発生したりする	98.8	96.4	n.s
一般的にタバコを吸う人は吸わない人より寿命が短い	93.4	76.3	p<0.05
少量のタバコは健康に影響がないと思う	11.6	12.9	n.s
タバコを吸い始めるのが早ければ早いほど健康に悪い	97.7	93.2	n.s
煙を肺まで吸い込まなければ健康に影響がない	8.9	13.7	n.s
隣の人の煙は自分にとって有害である	99.6	96.4	n.s
タバコはストレスを解消させる	60.6	33.8	p<0.01
喫煙で運動能力が低下する	96.9	77.3	p<0.01
タバコがやめにくいのはニコチンの影響である	95.4	91.4	n.s
人が集まる場所での喫煙は法律違反である	52.1	88.8	p<0.01

a 各項目に「そう思う」と答えた割合
b ²検定

表4. 将来の喫煙開始の意思 (%)

		A大学(日本)				B大学(韓国)		
		1年生 n=68	2年生 n=54	3年生 n=73	4年生 n=64	1年生 n=98	2年生 n=90	3年生 n=90
友人が喫煙をすすめたら吸ってしまうかもしれない	そう思う	5.9	1.9	6.9	4.7	9.1	6.7	2.2
	思わない	89.7	98.2	93.2	95.3	88.8	93.3	96.6
今後1年間に喫煙するか喫煙開始するかもしれない	そう思う	3	3.7	1.4	4.7	6.1	6.7	4.4
	思わない	92.6	96.3	98.7	95.3	91.8	93.3	94.4
5年後には喫煙をしているかもしれない	そう思う	4.4	3.7	5.5	6.3	2	2.2	0
	思わない	91.2	96.3	93.1	93.8	95.9	96.7	98.9

そう思う;「とてもそう思う」と「そう思う」の回答を合わせた割合
思わない;「全くそう思わない」と「そう思わない」の回答を合わせた割合
Mann-Whitney test p>0.05

「そう思う」の4段階であり、A大学とB大学の間には差が見られなかった(Mann-Whitney test p>0.05)。しかし、A大学では学年間の関連が見られないのに対してB大学は学年が上がるごとに喫煙開始の意思がやや低くなる傾向があった。(表4)

「喫煙を始めたなら止めるのは難しいと思う」に「そう思う」と答えた割合は、A大学86.9%、B大学55.3%であり、有意な差が見られた(p<0.01)。B大学では学年間の差はなかったが、A大学では2、3年次生で禁煙を困難と感じる割合が高く、1、4年次生で低くなっており、学年による禁煙困難感のとらえ方に違い見られた(図1)。

5. 喫煙者に対するイメージ

「喫煙をする男子学生/女子学生は友達が多い」、
「喫煙する男子学生/女子学生は格好よい」、
「喫煙する男性は男らしく洗練された大人に見える/喫煙する女性はおしゃれで知的な大人に見える」の項目で喫煙者に対するイメージを質問した。A大学とB大学の間で有意差はなく、イメージが悪い回答が高い割合を占めた(Mann-Whitney test p>0.05)(図2)。

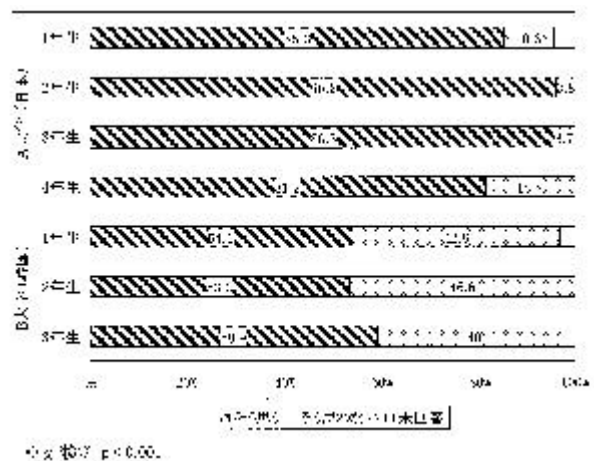


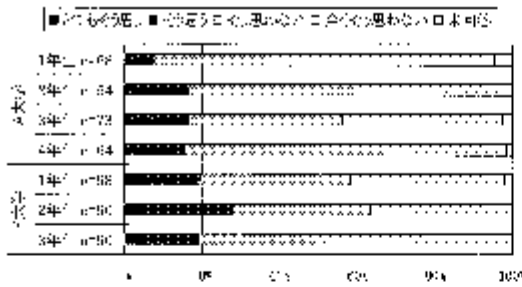
図1. 禁煙困難感

IV 考 察

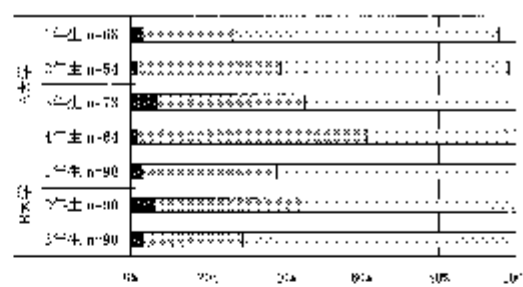
1. 看護大学生の喫煙行動

今回の調査の看護大学生の喫煙者の割合は、過去国内で報告されている10%前後^{3,8,9)}という値よりもかなり低い割合であった。これは、大学内で実施した自己記入式の質問紙調査であるという限界も考えられるが、著者ら

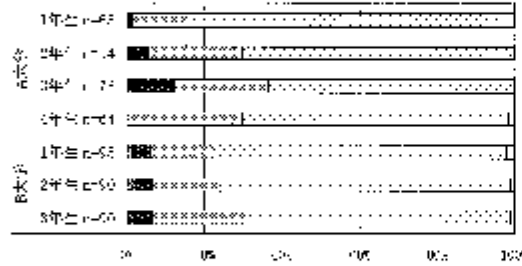
喫煙する男子学生はより友達が多い



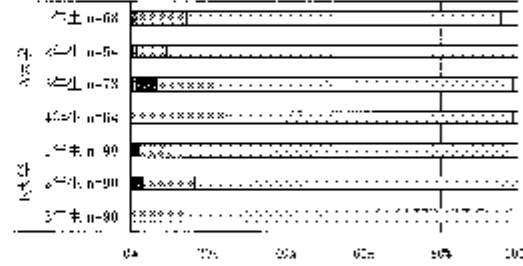
喫煙する女子学生はより友達が多い



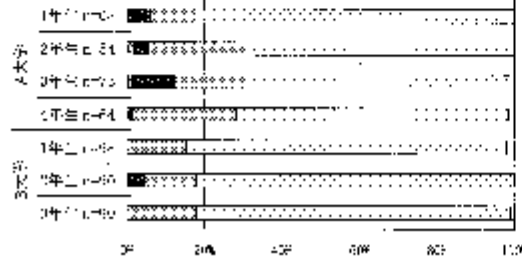
喫煙する男子学生は格好悪い



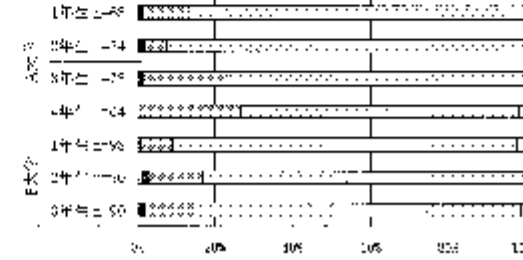
喫煙する女子学生は格好悪い



喫煙する男性は男らしく泥酔された大人に見える



喫煙する女性はおしゃれで魅力的な大人に見える



Mann-Whitney test: All $p > 0.05$

図2. 喫煙者に対するイメージ

が数年前に行った同様の調査報告^{1,2)}でも1.8%という値を示していたことから、地方都市にある大学の現状を示す妥当な値であると考えられる。国内で報告されてきた看護大学生の喫煙の調査は、首都圏で実施されたものが多いために地方都市での調査結果よりも喫煙者割合が高いことも考えられる。また、健康日本21施策や健康増進法の施行により、未成年者の喫煙防止対策がすすめられ数年の間に、若年者の喫煙者割合が急激に減少してきている¹³⁾ことも影響していると考えられる。結果では喫煙者の割合が低く、両大学間に有意差は認められなかったが、興味深いところは、A大学では3、4年次生に喫煙者があり、B大学では1、2年次生に喫煙者があったという学年の違いが認められた点であった。日本では、看護大学生の喫煙者割合は年齢が高くなれば増加するという結果がある^{8,9)}が、韓国では専門的医療従事者になるという意識の向上から看護師の喫煙者は少ない¹⁰⁾。また、韓国において看護師は、禁煙指導や禁煙カウンセリングの主要な役割を担っている⁷⁾。韓国の青年期の喫煙者割合は増加しているものの、看護師になるという意識

の芽生えから学年があがると禁煙を実施していることが考えられる。一方、日本では女性において看護師の喫煙者割合は一般女性よりも高い¹¹⁾。これは、日本の看護師は専門的業務上のストレス解消の手段として喫煙行動をとっているためである⁴⁾とされている。しかしながら看護師は、健康や医療に携わる専門職であり、役割行動と意識の変容を含めた教育の充実が必要である。

2. 喫煙に関する意識と態度

喫煙の健康影響では、身体面への影響や疾患との関連の知識を問う質問項目（肺がんなどの癌を引き起こす、早産や低出生体重に影響するなど）は両大学間に違いはなかった。しかし、回答者の認識や態度を問う項目（一般に喫煙者は寿命が短い、喫煙はストレスを解消させる、人が集まる場所での喫煙など）では、A大学とB大学の回答に違いが見られた。また、喫煙開始後の禁煙困難感でも両大学間に大きな違いがあった。これらは、喫煙に関する知識のレベルでは同程度であるが、喫煙への態度や認識のレベルでは違いがあると考えられた。B大学の

ある韓国では、禁煙対策が国の政策として推進されており法律での規制がなされている。また、企業などの禁煙支援プログラムも充実しており¹²⁾、禁煙しやすい環境が調っていることも影響していると思われる。一方、日本の禁煙対策は、小中学校からの教育において喫煙の害や悪影響を強調しながら、自らが喫煙しないことを認識して態度を決定していくという方法である。最近の政策としては、健康増進法の受動喫煙の防止と健康日本21での未成年者の喫煙防止であり、禁煙化のための直接的なものではない。

両大学ともに、喫煙者に対するイメージは悪く、これが大学生の段階で喫煙をしていないことに影響を及ぼしていると思われた。将来の喫煙開始の意思のある学生も非常に低い割合であることから、今回の対象から多くの喫煙者が生じる可能性は低いと考える。しかしながら、本当に喫煙を開始するものが少ないことを確認するために看護大学卒業後の看護師勤務状況時での追跡調査が必要であると思われる。

Ⅴ まとめ

日本と韓国の地方都市で看護大学生を対象に喫煙の状況と意識を同じ質問内容での自己記入法による調査で行なった。両大学の学生の生活背景では違いがみられたが、喫煙の状況は同程度で低割合であった。しかし、韓国B大学では低学年で喫煙者がみられ、日本A大学では高学年でみられるという違いがあった。喫煙に関する意識調査では、知識を問う質問項目では差がなく、認識や態度を問う質問項目では違いがみられた。これらには両国の喫煙対策のあり方の違いが影響していると考えられた。

謝 辞

本調査にご協力いただいたA大学医学部保健学科看護学専攻と韓国B大学看護学科の学生諸君に感謝申し上げます。

本研究は、平成18年度看護学研究奨励賞研究助成金を受けて実施したものである。

文 献

- 1) 中尾理恵子, 田原靖昭, 石井伸子, 賀来俊, 門司和彦: 大学生の喫煙行動と喫煙問題. 長崎大学医学部保健学科紀要, 15(1): 53-59, 2002.
- 2) 中尾理恵子, 田原靖昭, 石井伸子, 門司和彦: 未成年者に喫煙開始した若者の喫煙に関する認識とニコ

チン依存度 大学生の質問紙調査から. 保健学研究, 20(1): 59-65, 2007.

- 3) 大井田隆, 石井敏弘, 尾崎米厚, 武村真治, 曾根智史, 小倉正之, 木戸尚治, 針田哲, 正林督章, 川口毅, 箕輪真澄: 看護学生の喫煙行動および関連要因に関するコホート研究. 日本公衆衛生雑誌, 47(7): 562-569, 2000.
- 4) 河野由理, 三木明子, 川上憲人, 堤明純: 病院勤務看護婦における職業性ストレスと喫煙習慣に関する研究. 日本公衆衛生雑誌, 49(2): 126-131, 2002.
- 5) 大井田隆, 尾崎米厚, 望月友美子, 川口毅, 箕輪真澄: 三重県における看護師の喫煙行動に関する調査研究. 日本衛生学雑誌, 53: 611-617, 1999.
- 6) 大井田隆, 尾崎米厚, 岡田加奈子, 望月友美子, 杉江拓也, 川原和夫, 川口毅, 箕輪真澄: 看護学生, 新人看護婦の喫煙行動関連要因. 学校保健研究, 40: 332-340, 1998.
- 7) Jang-Rak Kim, Myoung-Soon Lee, Jin-Yong Hwang, Jong Deog Lee: Efficacy of a smoking cessation intervention using the AHCPR guideline tailored for Koreans: a randomized controlled trial. Health promotion International, 20(1): 51-59, 2005.
- 8) 岩本真紀: 看護学生の飲酒・喫煙に関する意識と行動および関連要因の検討. 香川医科大学看護学雑誌, 7(1): 39-47, 2003.
- 9) 大井田隆, 尾崎米厚, 岡田加奈子, 望月友美子, 小倉正之, 箕輪真澄, 川口毅: 看護専門学校と看護大学の学生における喫煙行動の比較. 日本衛生学雑誌, 54: 539-543, 1999.
- 10) 長弘千恵, 趙留香, 馬場みちえ, 児玉尚子, 尾坂良子, 吉永一彦, 畝博: 看護学生の生活習慣と主観的健康状態に関する日韓比較. 九州大学医療技術短期大学部紀要, 28: 27-38, 2001.
- 11) 社団法人日本看護協会専門職業部編集: 看護者たちの禁煙アクションプラン2004, 社団法人日本看護協会, 東京, 2004, 14.
- 12) Ryu Hee Joon: 韓国の常識, 株式会社実業之日本社, 東京都, 2005, 71.
- 13) 仲野暢子: たばこ規制枠組み条約から見た未成年者喫煙対策のありかた. 国立保健医療科学院, 54(4): 309-318, 2005.

Smoking Situation among Nursing Students in Japan and South Korea and Their Attitude on Smoking: Comparisons between Nursing Students in Nagasaki, Japan, and Those in Jinju, South Korea

Rieko NAKAO¹, Ryoko KAWASAKI¹, Michiko MORISHITA¹,
Kang Mal Soon², Kim Tae Kyung²

- 1 Department of Nursing, Health Sciences, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences, Nagasaki, Japan
- 2 Department of Nursing, Jinju Health College, Jinju, South Korea

Received 25 July 2008

Accepted 9 September 2008

Abstract We investigated a smoking situation among nursing students and their attitude on smoking. The subjects were nursing students studying at a university in southern Japan and those studying at a college in the southern part of South Korea. Differences were observed in the living background of the students at both universities, but the percentage of students who were smoking was almost the same in both universities and it was small (1.2 percent at A University (Japan) and 1.4 percent at B College (South Korea)). At B College those who were smoking were freshmen or sophomores, while at A University they were juniors or seniors. In an attitude survey on smoking, although no differences were observed in the items that ask about knowledge of smoking, differences were observed in those items that concern the awareness of smoking or attitude toward smoking. We believe that differences in measures taken against smoking in both countries are reflected in them.

Health Science Research 21(1) 11-16, 2008

Key Words : Smoking, Nursing Students, Attitude Survey, Japan and South Korea